

津波てんでんこ

～「釜石の奇跡」と「大川小学校の説明会」～

「津波てんでんこ」とは、日本の岩手県の三陸海岸地域にある津波防災伝承の一つです。「命てんでんこ」ということもあります。

これは、それぞれ「津波が来たら、取る物も取り敢えず、肉親にも構わずに、各自てんでんばらばらに一人で高台へと逃げろ」「自分の命は自分で守れ」になるといいます。また、自分自身は助かり他人を助けられなかったとしてもそれを非難しない、という不文律にもなっているようです。

3月11日当日、釜石市立釜石東中学校では「津波てんでんこ」を基に、生徒たちが教師からの指示も待たずに各自高台へと避難しました。その結果、校舎が津波に飲み込まれたにも関わらず、登校者全員の無事が確認され、「釜石の奇跡」とよばれるようになりました。

岩手県大船渡市三陸町(旧綾里村)出身で、津波災害史を研究する山下文男(1924年--2011年)は、父親からこの伝承を聞いており、その父親も、祖父から聞かされていたといっています。1933年(昭和8年)の昭和三陸地震による津波襲来時、山下は9歳だったが、山下の父親は「津波てんでんこ」に従って子に構わず自分一人で避難し、山下自身も自力で逃げて助かっています。

山下は自身のこの体験から、津波災害史研究者としてこの伝承を広め、三陸地域の防災教育にも採り入れられるようになっていったといっています。

ただ、『津波てんでんこ』という言葉だけが独り歩きし、高齢者等の「災害弱者」を省みない利己主義的な発想と非難されることもあり、その教えはなかなか広がりを見せていません。

近年、少子高齢化が深刻な三陸地域では、「津波てんでんこ」の伝承地域であっても、町内会等で自主防災組織が結成され、町内会長が高齢者の逃げ遅れがないよう点呼を行ってから集団避難することがルール化されてきており、岩手県・宮城県・福島県で震災1ヶ月後の4月11日までに検視された13,135人の死因の92.5%が水死で、全体の6割超が60歳以上と、多くの高齢者を津波から救うことが出来ませんでした。そればかりか、「てんでんこ」に反して災害弱者の避難誘導をしていたために、津波に巻き込まれて犠牲になるケースが多く発生しました。

それでも、少なくとも、子どもをあずかる立場の人々にとって、『津波てんでんこ』はおおいに活かされるべきであろうと思います。毎日新聞 1月22日(日)23時51分配信のWebページによれば、生き残った男性教諭が心の痛みに耐え切れず、校長、保護者あてに手紙を出したというのです。以下、記事文の引用です。

生存教諭の手紙を公表…大川小の説明会
毎日新聞 1月22日(日)23時51分配信

東日本大震災の津波で児童74人、教職員10人が死亡・行方不明となっている宮城県石巻市立大川小学校の保護者に対し、石巻市教育委員会は22日、約7カ月半ぶりに説明会を開いた。同小の柏葉照幸校長は「職務上の怠慢があったと言われても仕方がない。本当に申し訳ない」と謝罪した。大川小の被災を巡って市教委が明確な謝罪をしたのは初めて。教諭の中で唯一生き残った男性(休職中)が昨年6月、保護者と柏葉校長あてに書いた手紙の全文も初めて公表され、避難時のやりとりの一部が明らかになった。【竹田直人、石川忠雄】

◇「山に行きましょうと強く言っていれば」…教諭の手紙(要旨)

教諭の中で唯一生き残った男性が保護者と柏葉校長あてに書いた手紙(いずれも昨年6月3日付)は、説明会の前半に朗読された。石巻市教委は昨年6月の第2回説明会で、この手紙について「個人名が明記されている」などの理由で詳細部分は明らかにしていなかった。

この男性教諭は大川小の裏山に避難して津波を逃れたが、その後体調を崩して休職中。震災時は校外にいた柏葉校長あての手紙で「(現場にいて犠牲になった教頭に)最後に山に行きましょうと強く言っていればと思うと、悔やまれて胸が張り裂けそうです」などつつづっている。

各手紙の要旨は次の通り。

◇保護者の皆様

あの日、校庭に避難してから津波が来るまで、どんな話し合いがあったか、正直私にはよく分からないのです。その中で断片的に思い出せることをお話します。

子供たちが校庭に避難した後、私は校舎内に戻り、全ての場所を確認しました。全部回るにはかなり時間がかかりました。

校庭に戻り「どうしますか。山へ逃げますか」と教頭に聞くと、この揺れの中ではだめだというような答えが返ってきました。余震が続いていて木が倒れてくるというような理由だったと思います。

そのやりとりをしている時、近所の方々が避難所になっている体育館へ入ろうとされていたので、危険だから入らないようにお話しました。

近くの施設に避難しようとの話があり、危険だからだめだとのやりとりも聞こえてきました。

私は2次避難に備え、はだしで逃げてきた子や薄着のため寒さで震えた子がたくさんいたので、教室にあったジャンパーや靴などを校庭に運んでいました。トイレを我慢できなくなった子を連れて行ったりもしていました。

サイレンが鳴り、津波が来るという声が聞こえてきました。教頭に「津波が来ますよ。どうしますか。危なくても逃げますか」と聞きました。でも答えは返ってきませんでした。一番高い校舎の2階に安全に入れるか見てくるということで、私が見てきました。戻ってくると、子供たちは移動を始めていました。近くにいた方に聞くと、「堤防の上が安全だからそこへ行くことになった」ということでした。経緯は分かりません。

何を言っても、子供の命を守ることができなかった罪が許されるはずはありません。今はただ、亡くなられた子供たちや先生方のご冥福をお祈りする毎日です。本当に申し訳ございません。

◇柏葉校長先生へ

当時の状況を送信させていただきました。本当に申し訳ございません。当時の状況を思い出して恐ろしく、思い出そうとすると全身の血の気が引いて倒れそうになります。今、文章を打っていても手が震えます。

あくまで想像ですが、あの極限状態の中で、本当に教頭先生も迷われたのだと思います。ずっと強い揺れが続いており、木が倒れている(錯覚だったのかもしれませんが、皆そのように見えていたと思います。私も子供と山の中にいたとき、何度も揺れるたびに周囲の木が折れて倒れる音を聞いています。そのたびに場所を変えたのですから)状況の中、道もない山に登らせるのをためられたのだと思います。せめて1本でも道があれば、教頭先生も迷わず指示を出されたと思います。それだけに、最後に山に行きましょうと強く言っていればと思うと、悔やまれて胸が張り裂けそうです。